

近代文学に描かれた女性像 (その二)

—— 島崎藤村の場合 ——

浅井 峯 治

一 「六人の処女」

日本詩壇に、一大光明を点じた画期的な詩業といわれる明治三十年刊行の「若菜集」には、「六人の処女」と題する詩がある。

「処女^{むすめ}ぞ経ぬるおほかたの——」の大宮内に仕えた「おえふ」、
「……うまれながらの盲目^{めしむ}なれ」の「おきぬ」、
「潮^{うしほ}さみしき荒磯^{あらいそ}——」
生れの「おさよ」、「こひには親^{おや}もすてはてて」の「おくめ」、
「花灰^{はらの}見ゆる春の夜の——」の孤児として育った「おつた」、
「ああむかしよりこひ死にし」小春・梅川などに自己を比べる「おきく」。それ
ぞれ異なった性格と運命をもつ、うら若い女性を客観的に、巧みに
並べ詠って、そこに、数奇な運命に立く乙女たちの別々の姿を現わ
し、作者藤村の深い観察とローマン的抒情とを、ゆたかに表象して
いる。そして、その七五定型の格調と、悲しく、甘美なメロデー
とは、今もなお、青年男女の心を捉えうるものと、推賞されるだろ
う。

ただ、この中で求めるのは、求めるのがむしる無理であるだろう
が、各女性には、生れ出た人生を如何に生きるべきかという、思想。

観念の点に不十分のものがある。これは、作者藤村がなお年若くし
て、ひろく生命を体験せず、しかも、抒情として歌い出したもので
あるからであって、余儀ないことである。

二 性

やがて、仙台を去った藤村は、明治三十二年から同三十八年まで
七年間（藤村、二十八才—三十四才）を、生国信州の小諸に起居し
たが、この時、詩との訣別の覚悟を持つに到った。即ち小説・散文
への準備時代を考えたので、黙々として二・三年の間、自然・民俗・
人情等を克明に観照し、その描写の試みを、絶えず続けていった。
もとよりこれには、西洋文学の現実主義思想、日本文学では、二葉
亭四迷（一八六四—一九〇九）〔例えば、「浮雲」は、明治二十年
作。イヴン・ツルゲーネフ（一八一八—一八八三）の「ドミトリ・
ルーヂン」(一八五五作)の訳「浮草」は、明治三十年発表〕などの
影響を受けたことは当然である。かくて、「千曲川のスケッチ」と
呼ばれる一連の散文が書かれるに到った(明治三十三年)。なお、
その中に人間描写も見られ、「旧主人」(明治三十五年十一月「新小

説」に発表)、「老嬢」(明治三十六年六月「太陽」に発表)等には、特に、本能の奔騰に苦しむ女性が描き出されている。

前者では、信州小諸の荒井という旧家に、東京から貰われて来た、若く美しい後妻が、田舎生活の退屈さと愛情のない結婚生活とに堪えかねて、知合いの若い齒医者と不義の關係に陥ることになり、後者では、独身を通していた爪生夏子という女性が、私生児を生み、ついに、自身は狂人となってしまうというテーマである。

いずれも、人間の奥深い性というものを追求しようとしているかに見えるが、藤村は、この頃、外にも、「藁草履」(明治三十五年十一月「明星」に発表)、「爺」(明治三十六年一月「小天地」に発表)など、この種類の短篇物を発表している。

藤村のよき友であった田山花袋(一八七一—一九三〇)の「近代の小説」(大正十二年刊)を見ると、「島崎君の作は、どれを繙いて見ても、性慾の匂ひが盛んにしている。」とか、「島崎君ぐらい性慾に苦しんだ作家はないと言って好いだろかね。」とか評しているが、重厚謹嚴な人であっただけに、彼自身の性も、石を持ち上げる春の雑草のように、根強いものをもっていて、その心象が、創作の上に反映したものと考えられる。

後に触れる「新生」(註一)の問題も、こういう点をぬきにしては考えられない。

「旧主人」は、法律が姦通を禁止、従って、姦通小説はタブーであった頃だったので、発表すると、直ちに、発禁になってしまったが、一体、小説には、どうして、禁を犯してまで——もちろん、今

はそうではないが——不義を扱う作品が多く書かれるのであろう。

進藤純孝氏(一九二二—)は、「作家は、引きさかれた恋愛、結びあうことの困難な恋愛において、その障害や苦悩を油として燃えあがる恋愛を描こうとする。」その結果だといい、「姦通に形を借りて、中年の生命の秘密を描き出そうとしている。」(「考える女性の生きかた」(昭和三十八年刊)などともいつている。その他、臼井吉見氏(一九〇五—)は、「厳格きわまらないトルストイ(一八二八—一九一〇)が、姦通小説の傑作『アンナ・カレエニナ』の作者であることを考えてほしい。」といい、「姦通というような道ならぬ男女關係をとりあげながら、『アンナ・カレエニナ』が傑作であるゆえんは、人間愛欲のはてのはてまで見きわめようとした、トルストイの人間性追求のはげしき、徹底さ」(「小説の味わい方」(昭和三十七年刊)に依るとしている。

こういう批判は、もちろん、現社会に姦通を肯定することではなく、人間性の醜さ弱さを、飽くまで追求して見せて、人々に深く考えさせようとすることに外ならない。ここに、性小説は、如何に読むべきかという問題があるのである。

なお、作者の側について云えば、文学と実生活との問題があるが、眞の文学者には、頽廃を描いて頽廃を超え、不倫を描いて不倫を超えるべきだという信念が肝要である。この点から、芥川、太宰その他について、云うべきことがあるが、今は触れない。ただ、この頃出版された「一夫多妻論」という本を、ちよつとのぞいて見ると、世間では、一夫一婦といっているが、事実は一夫多妻の例が多い。

現に、巷間のあらゆる小説は、一夫多妻を描いて、大歓迎を受けているではないか。という意味のことが書かれていた。人間の弱さ空しさを追求している小説作者の筆を、そのまま肯定したものとして読む、その読みの浅さを、私は悲しく思った。

再び藤村物の女性像に移って見よう。

三 家

藤村の描いた女性で、次に考えられるのは、家の重圧におしひしがれたさまざまの女性である。

共に、藤村の長姉、高瀬園子をモデルにしているといわれている「家」(註2)のお種も、「ある女の生涯」(大正十年七月「新潮」に発表)のおげんも、封建制下、家父長時代、家族制度における家の犠牲となった女性である。

前者は、明治の社会変動の中に、小泉・橋本両旧家が没落して行く過程を、藤村自身のことばによれば、「屋外で起った事を一切ぬきにして、すべてを屋内の光景にのみ限」り、「文章で建築でもするのように」(「市井にありて」昭和五年刊)して書き上げたものであったという。お種は、「町へ出たことが無いと言って可い位……家の内にはばかり引込」んでいて、家事万端をきり廻し、夫達雄に仕えて、もっぱら、貞節と猷身とを心掛けていた。しかも、達雄の方は事業に失敗し、芸妓をつれて家出してしまふ。お種は「夫の放蕩の結果」(人には言えない長い病氣)に掛かり、身を食われるほどの苦痛に堪えねばならなくなる。

後者のおげんも、放縦な夫のために苦勞したが、果ては、その夫と息子とに死なれてしまふ。娘お新は、知能の發育が遅れ、年令四十才を過ぎて、子供同然である。それは、夫の悪疾のためであることを、おげんだけは知っていた。かくて、おげん自身も、夫から移された病毒に頭を犯されて、精神病院に入り、ひとり淋しく死んで行くという筋のもの。

これらは、家族制度の下、家長を絶対として、その不倫・非道にも、ひたすらに服従させられ、悲しい運命にさいなまれて、淋しく世を去る、あまりにも悲しい女性の姿である。

家の重圧は、もちろん、「家」でいえば、達雄や正太や三吉たちにもしかかるのであるが、その中に生きる女性にとっては、それらの男性への奉仕をも含めて、一層、重い圧迫となっているのだった。

私のみならず、これらの作品を読む者は誰しも、彼女たちの悲痛で暗い運命に対し、胸をしめつけられる思いをしない人は、ないであらうことを信ずる。

四 「新生」(註3)

藤村の人生途上、最も大きな事件であった、いわゆる「新生」事件は、小説「新生」(註1)の発表となつて、一応の結着を見たといわれているが、この「新生」については、平野謙(「島崎藤村」昭和二十二年刊)、瀬沼茂樹(「島崎藤村」その生涯と作品)昭和二十八年刊、「評伝島崎藤村」昭和三十四年刊)、猪野謙二(「島崎藤

村」昭和二十九年刊)などの諸氏による詳細で卓抜な研究・評論が公刊されている。

私が、今、扱っているテーマの中に、特にこれを取りあげるのは、「新生」も亦、前述「性」と「家」との両要素から眺めて見ることによって、その姿態の幾分を、よりよく、捉えることができると思ふからである。

さて、作の主人公である中年作家の岸本捨吉は、妻に先立たれて三年、ただ「黙って黙って絶間なしに労作を続け」(序の章、五)ている毎日であったが、それは、「死んだ沈黙」(同上)であり、「生の氷」(百一)ともいふべき状況であった。

岸本は、自分の部屋を「北海道の曠野に立つといふ寂しいトラピストの修道院」に譬え、自分の身を、その中の僧侶達(修道者)に譬えて見たりする(二)。そして、彼が、周囲からの縁談を断るのは、死んだ妻との結婚生活にみた両性の相剋のような家庭に絶望したからであったし、独身を「女人に対する一種の復讐」と考え、「女性を厭うところから」(下、八)も来ているのだった。こうして、岸本は、二人の子を他にあずけ、泉太、繁の二人を手元において、婆やと姪の節子と五人暮らしを続けていたが、岸本が四十二の厄年、節子が「二十一といふ歳を迎えたばかりの時」(十三)、「節子は極く小さな声で、母になったことを岸本に告げた」(同上)のである。田山花袋(明治四―昭和五)が、藤村は自殺するかもしれないと、知人に語ったこともあるというのは、小説のこの部分が、新聞に発表せられた時のことだった。

一体、どうしてそんなことになったのか。節子について、

特に岸本の心を誘惑すべき何物をも彼女は持たなかった。唯叔父を頼りにし、叔父を力にする娘らしさのみがあった。何といふ「生」の皮肉だらう。(十五)

と書かれているように、内なる「生」が犯した過ちの結果である。この「生」は、外のところでは、「本能的な生の衝動」(序の章、一)とも書かれている。

かくて、岸本は逃れるように、海外の放浪へと出発した。

三年間、逃避行の後、帰って来た岸本に、縁談が起った時、「低気圧」(下、二十八他)と書かれている節子の不機嫌が続いたのも、節子の内なる「生」であったのだといえよう。

しかし、いつまでも続くその低気圧を見るに忍びず、岸本は、ある朝早く、台所でひとり働いていたその節子に、小さな接吻をしてしまった(下、三十一)が、それから後の節子の日常は、打って変っていきいきしたものとなってくる。

その後、小説には、法律が禁ずる三親等以内の結婚を敢えて行なおうとする心と、世間の常識に従って、それを拒否しようとする心との、いたまじき葛藤が燃えさかっている。

世間の常識というのは、前述の「家」に相当するもの、具体化された人としては、節子の父義雄、伯父の民助その他がいる。

義雄は、岸本に対して、「ここに涙を振って足下を義絶す」(下、百十九)と書いて、手紙を結び、その後、

世の中の善きも悪しきも知れる身のなど踏み迷ふ人の正^まみち

という歌を、「諷諭の意を寄せたらしく書き添え」(同上)たという。

義雄にとつては、「世の常の道」「一門の名誉」「外聞」(下、二十)というようなものが、最も大切なものであり、世の中は、こういうものを中心として、廻転すべきものだと考えられている。そして、長兄民助は、節子を台湾へ連れて行くことを、岸本が承知した時、「や、そいつは有難い。」といい、更に、

……世の中のこととは淡泊にかぎるよ。俺はその主義サ。……あれで節ちゃんも台湾へでも行つてだナ、すこし経つて見たら、馬鹿々々しいことをしたと自分でも左様思ふかも知れない。

(下、百三十四)

と述べたことになっている。

しかし、義雄と捨吉とでは、「人の正^まみち」とするところが異なっていた。節子も、父に手紙を書いて、

親の命に服従せざるは人間ならずと仰せられ候へども、それは余りに親権の過大視に候はずや(下、百十九)

何事も唯々諾々としてその命に従ひ、あるひは又、小部に反感を抱きながら表面には唯これに従ふがごときは、わが望むところにはこれなく候。生命ある真の服従こそわが常の願ひに候。

(同右)

と云い、更に続けて、「徹底を願ひ、真実を慕ふおのが心の苦痛」を述べ、「宗教」精神にふれる。けれども、義雄から見れば、そんなことは、「百萬遍の迷ひ言」(下、百二十)であり、「宗教なんて

のに倣なものは無い。そんなものを信じる奴は馬鹿ばかりだ。」(下、百三十一)といった調子であった。

結局、節子は、家門といい、日常の人倫という、そういうものに對して、お種やおげんたちのように、ただ盲従せず、真実の自己を生かそうと考える、それだけである。

世の常の道から見たら、異常であり、親にも兄弟にも親戚にも、諒承せられぬが、自己の真実を生かそうとする道を、節子は「創作」(下、五十四、下、百二十他)ということばで呼んでいるのである。

これに對して、岸本は、節子の手紙が「『創作』といふ言葉で二人の間の結びつきを言ひ表さうとしてあるのに心を曳かれた。」(下、五十四)と書いている。また、他のところでは、「岸本は、つくづく『創作』の力を思ふといふ彼女を想像し、誰一人理解するものもない彼女の周囲を想像し、親の心に背いても生きて出ようとするものの涙の多い朝晩を想像した。」(下、百二十)と書かれている。

真実の文学は、伝統を打破する、新しきモラルの創造にあるといわれるが、節子は、

何時でも御一緒なんですもの……創作のために払ふ犠牲は嬉しうございます。(下、百三十八)

という離別の涙のにじんだ手紙を書き、愈々台湾へと出発する時には、

わが心にあらず、御心のままに。

心からの信頼をもつて遠い旅に上る身の幸を思ひ、そのよこびをここに残してまゐります。(下、百四十)

と、岸本に手紙を書いている。そして、古い数々の写真や男の児の人形や手紙など、思い出の一切を岸本にあずけ、ただ、岸本から送られた数珠だけをもって出掛けてゆくこととなる。私たちは、この小説に度々出てくるアペラアルとエロイズの事蹟(百二他)を思い浮べて、ここに、ほのぼのと、宗教生活への門の開かれ行くことを感ぜざるを得ない。

くりかえしていえば、節子には、「一門の名譽」とか「旧い道德」(下、六十五)とかいうものを超えて、自己の眞実に生き、新しきモラルを創造したいという、目ざめが萌え出たのである。

これを、婦人解放運動の時代的背景との関連において眺めたいが、今は省略することとする。

「新生」事件については、事件そのものの後日譚が、相当詳細に調査せられて居り、「国文学」昭和三十九年十月号、伊東一夫氏の論文等)それをもとにして、「新生」という小説を批判する向きもあるようである。しかし、私は、この事件が小説では理想化せられているとか、藤村が自分に都合のわるいところを省いているとかいう、そうした穿鑿に、あまり興味は持っていない。一文芸作品としての「新生」が、私に与える総体的感銘を、すなおに受け取りたいと思う、それだけである。

五 生 活 力

「新生」を読みながら、節子の生活について、特に、「あはれ」に感ぜられるのは、彼女が何等の生活力をもたぬということであろう。

もつとも、「新生」は、平野謙氏によれば、恋愛からの自由と共に、金銭から自由を得ることが発表の動機であるというが、その論の当否は別として、

岸本は誰も人の居ないところへ行つて、独りで自分の右の手を出して見た。そして、自分に問ひ、自分に答えた。

「矢張、金の問題が付いて廻る——どうも仕方がない。」

………自分の罪過そのものが何処から出すともなく出してよこす暗い手だ。(下、二十四)

ということばが見えるように、親族に対する経済的負担によつて、岸本はかなり苦しめられていた。こうして、岸本の節子に対するさやかな心遣いまでが、随所に、はつきりと書かれているのである。

岸本が外国の旅から帰った頃、節子は手に水虫を煩つていて、弱々しく、「生きた屍」(下、四十四)にも等しい状況であり、父義雄からは「片輪の一人ぐらい」(下、三十一、九十四)といわれる厄介者になつていた。

それが、岸本の仕事を手伝い、貰つたお金を全部、母の方へ出すようになる。「何となく彼女の位置を変へて見せた。」し(下、四十七)、岸本も、嫂が、機嫌の好い顔をして「お蔭で節も稼ぐやうに成りましたよ。彼女がお金を持って来て見せましたよ。」(下、四十七)というであろうことを、楽しく想像したりしているのである。

生活の力を持つということとは、こんなにも周囲の状況をかえてしまふものか。

しかし、この手伝いも、叔父、姪の關係の再燃を知つた父義雄の

激しい怒りによって、断ち切られてしまった。こうして、愈々台湾へ行くようになるが、岸本は、節子に本など読んでいないで、民助の細君である嫂の仕事をよく手伝えといい、

どうせ義雄さんの方から節ちゃんのお食ひ扶持が行く訳ではなからうし、台湾の伯母さんから見れば厄介者が一人舞込むやうなものだからねえ、男はそこへ行くと大ざっぱだが、女の人は細いから。(下、百三十九)

とも、節子の姉の輝子に云っている。

どこまで行っても、自活のすべをもたぬ者の「あはれさ」である。

六 母 性

誰もいうように、叔父・姪という異常な関係の最初の方は、この小説には、殆んど、語られていないが、それは、前にも引用した「生」の持つ秘密であろう。しかも、男の子を生んだ節子は、「非常に年齢の違つた、鬢髪の既に半ば白い」岸本に、「小さな胸を展げ」、「その関係の根深いことを想はせる」(八十七)のであった。

そして、節子は、「不義の観念を打消することによって彼女の母性を護らうとして居るのではないか。」(八十七。下、五十四、百二十四)と、岸本に思わせ、またの手紙には、「叔父さんのことを思ひ、自分の子供のことを思ふ度に、枕の濡れない晩は無い。」(百九)とも書いている。更に、岸本から贈られた小さな男の児の人形を見て、「節子の眼から留めどの無いやうな涙を誘ひ出した。」(下、七十四)と書かれ、「彼女の呑まうとする啜泣の声は、どうかすると祖母さ

んや久米や女中にまでも聞えさうに成つて来た。」(下、七十四)とも出ている。それから後にも「一月ほど前に岸本から送つた男の児の人形を大切にしているばかりに母らしい悲哀を寄せている節子」(下、八十三)と描かれていた。

節子は、母性に生きることによって、岸本に深い永遠の愛情を寄せたし、自分の手を離れてしまったわが子を思い、底しれぬ悲しみに浸りもするのである。

七 結 び

以上、私は、藤村の描いた女性像について、性、家、生活力、母性という各方面から眺めて来たが、特に、「新生」の節子に照明を当てて見た結果の試論的叙述ともなつた。

最後に、私は、「新生」の「罪で罪を洗ひ、過ちで過ちを洗ふ。」(下、四十四)という辞句を結びとして、この類の作品を読む人々に、生の秘鑰ひやくという大問題を熟慮してほしいと思ふものである。(昭和四〇、一、二)

註1、上巻(前篇または第一部とも) 大正七年五月から十月まで、下巻(後篇または第二部とも) 大正八年八月から十月まで、共に「東京朝日新聞」に連載。

註2、前篇、明治四十三年一月から五月まで「読売新聞」に連載。後篇、「犠牲」と題し、「中央公論」の明治四十四年一月号及び四月号に分載。

註3、以下、()内の漢数字は「新生」の章名。下巻は下とした。特に断つてないのは上巻。